

交流学級は特別支援学級在籍児童にとってどのような役割を果たしているか —教師の意識調査から—

41825004 金森 豊

1. 研究の背景

2004年6月に障害者基本法が改正され、文部科学省(2008)は、障害のある子どもと障害のない子どもと一緒に参加する活動は、相互のふれ合いを通じて豊かな人間性を育むことを目的とする交流の側面と、教科等のねらいの達成を目的とする共同学習の側面があるものと考えられていると述べている。さらに、文部科学省(2012)は、小・中学校における通常の学級、通級による指導、特別支援学級、特別支援学校といった、連続性のある「多様な学びの場」を用意しておくことが必要であると述べている。国立特別支援教育総合研究所(2018)は、交流及び共同学習についてのチェックリストを作成した。このチェックリストの5領域16項目について、小・中学校の通常学級(交流学級)担任を対象とし、学校間交流・居住地校交流、小・中学校内交流における交流及び共同学習の実施状況と重要度の2つの視点から回答を求め分析している。その結果、全ての項目において、実施していると回答した割合は80%以上であった。しかし、「うまくいっている」と50%以上が回答した項目は、全16項目のうち6項目に過ぎない。重要度については、通常学級担任は全ての項目について重要と考えていることが明らかとされている。つまり、それぞれの項目が重要だとは分かっているが、うまくいっていないと感じている状況であると考えられ、実施できていない理由やうまくいっていない理由については詳しく述べられていない。また、文部科学省初等中等教育局(2018)は、交流及び共同学習については、各学校において様々な取組が進められているが、取組に対する教職員の意識の差も見られ、教職員の中には、取組の重要性は理解していても、どのように取り組めばよいのか分からない者もいると述べている。長山・勝二(2018)は、特別支援教育において「共生」の理念に近づくためには、通常の学級の担任と特別支援学級担任の「共生」から始まるべきであると述べており、小学校においては通常学級担任と特別支援学級担任の共通理解なしでは特別支援学級や通常学級のすべての児童にとっての「共生」を目指すことができないとも言える。

2. 研究の目的

本研究において、交流及び共同学習とは、小学校内における交流及び共同学習を対象とし、場面としては、通常学級を基本とする集団活動の中に、特別支援学級在籍児童が個人として参加する場面

を想定している。そこで、特別支援学級担任が交流学級に望むこと、交流学級である通常学級担任の受け入れる側としての思いや悩み等の共通理解が行われることが望ましいと仮定し、通常学級担任を対象としたアンケートによる意識調査や交流及び共同学習に取り組んでいる通常学級担任と特別支援学級担任の両者への聞き取り調査を行い、交流及び共同学習の現状を捉える。また、特別支援学級在籍児童と通常学級在籍児童双方にとって効果的な交流及び共同学習となるよう、通常学級担任と特別支援学級担任それぞれが配慮すべきことや心構え等をまとめたいと考えた。

3. 研究の方法

(1) 研究1 実施対象

20XX年の9月から10月にかけて、中部地方の公立小学校の教員のうち、20XX年度またはその前年度に交流学級であった通常学級担任151名を対象とした。その中には20XX年度の臨任講師や前年度の前任校での経験者も含む。男性57名(37.7%)、女性94名(62.3%)。

研究1 実施内容

調査は、アンケート質問紙への無記名回答で行った。ただし、実施状況についての傾向を捉えるため、フェイスシートには、性別、年齢、経験年数、特別支援学級担任経験の有無を選択肢で回答する項目を設けた。先述した「交流及び共同学習についてのチェックリスト」を基にアンケートを作成した。5件法を4件法にし、回答しやすいようにアンケート項目にある「障害のある子ども」を「特別支援学級在籍児童」と置き換えた。本研究は、国立特別支援教育総合研究所(2018)の研究を踏まえて、全16項目が重要であることを前提とし、実施状況のみを調査した。また、経験年数別、特別支援学級担任経験の有無によって項目ごとに差があるのか、クロス検定を行った。

(2) 研究2 実施対象

20XX年の9月から10月にかけて、中部地方の公立小学校の教員のうち、20XX年度の特別支援学級担任16名(知的障害学級8名、自閉症・情緒障害学級8名)とその交流学級である通常学級担任16名の計32名を対象とした。男性9名(28.1%)、女性23名(71.9%)。

研究2 実施内容

調査は、事前に協力依頼をし、同意を得た小学校へ訪問し、直接聞き取り調査を行った。交流学級である通常学級担任と特別支援学級担任のそれ

それに、交流学級で交流及び共同学習を実施する上で「①大切にしていること」、「②困難さを感じていること」、「③特別支援学級在籍児童や通常学級在籍児童にとっての意義」の3つの質問を中心に、口頭で半構造化面接を行った。会話はICレコーダーで記録し、活字に起こし、質問に対して得られた回答をKJ法で分類した。カテゴリー数をカウントし、表記については、大項目を< >, 中項目を【 】、小項目を〔 〕を用いて分析した。

4. 結果と考察

研究1の結果をTable1に示す。通常学級担任は全ての項目についておおむね実施していると回答している。「4.実施していて充分うまくいっている」と最も多く回答した「I-(4)学級への帰属意識」については、机やロッカー、名簿への記載等、環境整備の面で、学校全体で一つの方針を示し、一体となって行っていることがうかがえる。

また、「V事後学習と評価」については、他の項目に比べて、「0.実施していない」と回答した人数が多い。同じ小学校内で毎日のように行われている交流及び共同学習において、改めて交流及び共同学習の視点からの振り返りを行っていないと捉えたことが考えられる。同じく割合が相対的に高かった項目として「III-(8)補助的教材・教具」が挙げられる。項目に「特別支援学級在籍児童の実態に適した」とあることから、特別支援学級在籍児童に限ったものは作成していないということだ

ろう。多くの児童が在籍している通常学級担任にとっては難しいことであると言える。しかし、クロス検定の結果、特別支援学級担任経験がある担任の方がうまくいっていると回答した割合が高かったことから、特別支援教育の経験や専門性が生かされているとも考えられる。また、特別支援学級担任の経験がなくても実施していると回答した担任もいることから、特別支援学級在籍児童に限ってではなく、通常学級における気になる子への支援と合わせて準備していることも考えられる。学びのユニバーサルデザインガイドライン(2011)における3原則を基に、児童の多様な学習ニーズや個々の力に応じて選択できる授業づくりにつなげていくことで、様々な児童が在籍するそれぞれの学級に合った支援が生まれていくと考える。

さらに、経験年数別の結果で差が見られたところでは、経験年数の多いベテラン教員の方が「I-(2)思いや願いを反映」の項目において「4.実施していて充分うまくいっている」という回答の割合が高かった。本研究では、児童や保護者に直接アンケートを実施していないため、交流及び共同学習の満足度については推察の域を出ないが、少なくとも児童や保護者の声に耳を傾け、指導に生かすことは大切である。富山県総合教育センター(2018)では、学校におけるチームによる支援体制づくりを促進するための情報共有と合意形成の方法として、エピソードプロセス(以下、ep)と呼ばれるケース会議の仕組みを開発した。epは児童生

Table 1 交流及び共同学習の実施状況 (n=151)

	0 実施して いない	1 実施しているが うまくいっていない	2 あまりうまく いっていない	3 まあまあうまく いっている	4 実施していて 充分うまくいっている
I 事前準備					
(1) 特別支援学級担任と、事前に打ち合わせを行い、必要な情報を共有している。	2	5	15	99	30
(2) 特別支援学級在籍の児童本人、保護者(家族)の思いや願いを知り、反映させる工夫をしている。	8	11	37	89	6
(3) 学級の子供たちが特別支援学級在籍の児童について理解できるよう工夫している。(その子供の好きなこと、苦手なこと、コミュニケーションの方法、必要な支援や協力の仕方を事前に伝える、等)	9	12	21	99	10
(4) 特別支援学級在籍の児童が、学級に帰属意識をもてるよう工夫している。(靴箱・机・ロッカー等を用意、名簿や掲示物に氏名記載、等)	1	9	9	74	58
II 目標の設定の工夫と学習活動の変更調整					
(5) 特別支援学級在籍の児童と学級の子どもそれぞれの実態に応じて、交流及び共同学習の目標や教科領域の目標を設定し、目標に向かって取り組んでいる。	17	7	52	66	9
(6) 特別支援学級在籍の児童が学習に取り組みやすいよう、活動の設定を工夫している。(参加する場面の設定、授業・学習活動の内容や方法の変更調整、等)	11	13	45	68	14
III 子どもの積極的参加のための活動の工夫					
(7) 特別支援学級在籍の児童と学級の子どもたちが、相互に協力しながら取り組めるよう工夫している。(ペア学習、グループ学習、等)	6	14	26	91	14
(8) 特別支援学級在籍の児童の実態に適した補助教材や教具等を工夫している。	38	7	62	41	3
(9) 特別支援学級在籍の児童も学級の子どもたちも理解しやすいように、情報を様々な方法で提示している。	11	8	35	85	12
(10) 特別支援学級在籍の児童も学級の子どもたちも、活動の中で自分に合ったやり方を考えたり選択したりできるよう工夫している。	9	10	41	80	11
(11) 特別支援学級在籍の児童も学級の子どもたちも自分の思いを表現できるよう、発表や表現の仕方を工夫している。	8	15	47	72	9
IV スタッフの役割と子どものサポート					
(12) 学級担任、特別支援学級担任、支援員、保護者等かかわる大人が、交流及び共同学習における役割を確認し、目標の達成に向けて取り組んでいる。	11	5	28	95	12
(13) 学級の子どもたちが多様性を尊重する心を育むことができるよう、学級担任自身がお手本となることを意識して特別支援学級在籍の児童とかかわっている。(直接的・間接的)	6	7	19	93	26
V 事後学習と評価					
(14) 交流及び共同学習の後に、学級の子どもたちがよかったことや感想等について振り返りができるよう工夫している。	34	9	40	60	8
(15) 交流及び共同学習の授業・学習活動についての学級担任自身や学級の子どもたちの振り返りを、次回の計画に生かしている。	24	10	55	56	6
(16) 交流及び共同学習をより充実させるために、間接的な交流に取り組んでいる。(手紙や学級便りを届ける、学級集会のお知らせや招待、等)	26	6	31	65	23

徒のリソースを生かし、支援者の当事者的な役割分担につなげるために、顕在化した行動ばかりでなく、児童生徒の心情を想像する手順を含むことに大きな特徴をもっている。富山県総合教育センターが実施する学校支援訪問研修で ep を用いて児童生徒理解を促進することを目的に教員研修を実施したところ、児童生徒の心情を想像することにおいて、若手教員の方がより柔軟で多様な捉え方が見られる傾向を見出している。特別支援学級在籍児童や保護者と直接話す機会が少ない通常学級担任にとっては、心情の想像も有効であると言える。チェックリストに回答した若手教員にとっては、今まで意識していなかった「I-(4)学級への帰属意識」「IV-(13)お手本となる意識」等の項目に目を向けるきっかけになったとも考えられるので、研修を重ねることで、今後様々な取組が期待できると考える。

研究2において、「①大切にしていること」で、最も多く挙げられたのは、＜共通理解＞であった。中でも、通常学級担任と特別支援学級担任いずれも【事前打ち合わせ】が大切だと感じている。それは担任以上に、児童が見通しをもてず不安になることを避けるためである。今回の協力者の特別支援学級のほとんどには複数学年の児童が在籍している。時間割を基に、毎日の学習予定を計画しているが、学校行事の練習等、急な時間割変更を要する場合も少なくはない。そういった複雑さから、多くの教員が困難さも感じている。急な予定変更を伝えるための連絡票の活用、給食時間に交流学級の連絡黒板を確認するなどの様々な工夫が見られた。

特別支援学級担任が最も多く挙げたのは特別支援学級在籍児童に対しての＜個別的なサポート＞であった。複数学年が在籍することで【付き添う】ことが難しい状況にある特別支援学級担任は【事前サポート】【事後サポート】を大切にしている。

【事前サポート】においては、[見通しをもたせる]こと、[不安なことを聞く]ことで、児童の不安を取り除き、安心して参加できるよう情緒面でのサポートを重視している。また、必要に応じて【事前練習】をすることで安心感を与えるだけでなく、集団の中で「分かった」「できた」という経験を積み、自己肯定感を高めている。【事後サポート】では、[がんばってきたことを聞く]ことで、自己評価し、特別支援学級在籍児童への自信につなげている。また、必要に応じて、難しかったことやできなかったことも自立活動等と関連させ、特別支援学級担任が【補充学習】を行っているが、十分に行うことは難しい。特別支援学級在籍児童と通常学級在籍児童それぞれの交流及び共同学習におけるねらいや手立てを明確にし、交流学級での交流及び共同学習の時間が充実したものとなるよ

う考えていかなければならない。文部科学省(2019)が「交流及び共同学習ガイド」で取り上げた事例に、「2月になると、特別支援学級担任と交流学級の担任とで担任者会を開き、各教科の学習の様子についての情報交換をし、その時に次年度に交流及び共同学習を実施することが可能な教科についても検討する」とあった。日々忙しく時間の確保が難しいが、今年度の取組の成果や課題を踏まえ、今年度中に次年度の方向性を検討しておくことは、特別支援学級在籍児童と次年度に交流学級となる通常学級担任にとっても円滑に交流及び共同学習を進める上で重要であると考ええる。

通常学級担任が最も多く挙げたのは特別支援学級在籍児童に対しての【授業中のサポート】の【声かけ】であった。困っている時や指示を理解しているか確認する【声かけ】だけでなく、「がんばっているね」「ここまでできたね」など励ましの【声かけ】をすることで、学級の一員であることを感じられることにもつながっている。交流学級で主となり授業を展開する通常学級担任は、通常学級の中の気になる子にも支援していく必要があるため、＜クラス全体への支援＞として学級全体の児童が理解できるような【声かけ】も大切にしていることが明らかとなった。

「②困難さを感じていること」で、最も多く挙げられたのは、通常学級担任と特別支援学級担任いずれも＜共通理解＞の【特性理解】であった。epにもあるように「その子ができていることやもっているもの」を共通理解し、リソースを生かした支援を考えていくことが重要であると考ええる。先述したように担任者会を開くことや個別の指導計画等を生かした情報共有の在り方を今一度見直していく必要があるのではないだろうか。また、様々な困難さを感じる根底にあるとも言えるのが＜通常学級の現状＞であろう。学びのユニバーサルデザインの考えに転換し、通常学級に在籍する【気になる子への支援】を考えていくことが結果的に特別支援学級在籍児童を含む全ての児童にとって有効な支援になっていくことが負担感もなく望ましい。また、それに伴って【通常学級担任の意識】も変容していくのではないかと考える。特別支援学級担任への聞き取りの中で、「特別支援学級在籍である前に、『〇年生の、〇年〇組の一員である』と子供自身が思っていることを知ってもらいたい」という回答があった。今一度通常学級担任一人一人が振り返る必要性があると感じた。

聞き取りをする中で、交流の側面においては多くの効果的な事例が出てきたが、共同学習の側面である【目標や学習のねらいの設定】については、困難さを感じている教員が少なくない。大切にしていることに挙げられた【視覚的支援】等の学習支援に焦点を充てた研修等を生かし、担任間で協

議していく必要があると考える。

「③-1 特別支援学級在籍児童にとっての意義」は、集団の中での＜社会性＞を養い、小さな社会である集団でのルールを学ぶ【自律】が多く挙げられた。また、ソーシャルスキル・トレーニングで学んだことを実践する【自立】を支えていること、また、同学年の仲間から【模範、モデル】となる人を見つけ、見方やかかわりを広げていくことができる意義も有することが明らかとなった。＜所属感＞を感じ、仲間と共に過ごす大切な時間であり、これらの経験が「交流及び共同学習ガイド」でも述べられているように、学校卒業後においても、障害のある子供にとっては、様々な人々と共に助け合って生きていく力となり、積極的な社会参加につながることを期待できる。

「③-2 通常学級在籍児童にとっての意義」は、＜特性・障害理解＞で【かかわり方を学ぶ】ことが最も多く挙げられた。それらの中で【やさしさ】や【思いやり】を育み、自然なかかわりで【サポート】する児童が増え、＜自己有用感＞が高まることも明らかとなった。「交流及び共同学習ガイド」では、障害のない子供にとっては、障害のある人に自然に言葉をかけて手助けをしたり、積極的に支援を行ったりする行動や、人々の多様な在り方を理解し、障害のある人と共に支え合う意識の醸成につながると述べている。本研究で得られた聞き取り結果は、文部科学省が示した意義に一致していたと言えるだろう。

5. まとめと課題

研究の結果、以下のことが明らかとなった。

- ・交流学級は特別支援学級在籍児童にとって、小さな社会である集団の中で社会性を養い、人とのふれあいを通して所属感を感じられる役割を果たしていると考えられる。
- ・通常学級在籍児童にとっても、障害理解を含む相互理解や様々な人とかかわることで自己有用感を感じられる意義がある。

「交流及び共同学習ガイド」では、交流及び共同学習の意義について、障害のある子供にとっても、障害のない子供にとっても、経験を深め、社会性を養い、豊かな人間性を育むとともに、お互いを尊重し合う大切さを学ぶ機会となるなど、大きな意義を有するものと述べている。本研究においても、特別支援学級在籍児童と通常学級在籍児童の双方にとって大きな意義を有するものであることが明らかとなった。

そこで、特別支援学級在籍児童と通常学級在籍児童双方にとって効果的な交流及び共同学習となるよう、交流学級である通常学級担任と特別支援学級担任それぞれが配慮すべきことや心構え等について本研究を基に以下のようにまとめる。

- ・特別支援学級担任と通常学級担任は、年度当初、年度途中、年度末に今年度の交流及び共同学習についての共通理解をする場をもつことが望ましい。共通理解の内容については、①特性・障害種、②リソース（もっているものやできていること）、③特別支援学級在籍児童本人・保護者の願いや援助ニーズ、④特別支援学級での効果的な支援方法、⑤交流及び共同学習や教科・領域におけるねらい、⑥時間割等の連絡調整の方法の6点は必ず含み、その他必要に応じて個別の指導計画等を活用し、連携を行う。
- ・通常学級担任は、特別支援学級在籍である前に特別支援学級在籍児童は○学年の一員であるという意識をもち、お手本となるかかわりを他の児童に示すよう心掛ける。なお、机の配置、掲示物、記名等の環境整備も含む。
- ・通常学級に在籍する気になる子への支援が結果的に特別支援学級在籍児童を含む全ての児童への有効な支援につながることから、通常学級担任は学びのユニバーサルデザインを積極的に取り入れる。

一方で、本研究にはいくつかの限界や今後の課題もある。本研究は教師の意識調査を基に研究を進めたため、児童や保護者の声を反映することができなかった。また、交流及び共同学習における交流の側面では十分な実践事例が挙げられたが、共同学習の側面で困難さや悩みを感じている教師が多い。「交流及び共同学習ガイド」において、二つの側面を分かちがたいものとして捉え、推進していく必要があると述べられていることから、共同学習の側面での実践事例を広めていく必要があると考える。児童にとって、学校や学級という小さな社会での「共生」の第一歩となるこの交流及び共同学習について今後も大切に考えていきたい。

【主要参考文献】

- CAST(2011)学びのユニバーサルデザインガイドライン、
udlguidelines.cast.org/binaries/content/assets/
udlguidelines/udlg-v2-0/udlg-fulltext-v2-0-japanese.
pdf(参照日 2020.1.28)
- 国立特別支援教育総合研究所(2018)交流及び共同学習の推進に関する研究、www.nise.go.jp/cms/resources/content/7412/20180628-115348.pdf (参照日 2020.1.28)
- 文部科学省(2012)共生社会の形成に向けたインクルーシブ教育システム構築のための特別支援教育の推進(報告)、
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/044/attach/1321668.htm (参照日 2020.1.28)
- 文部科学省(2019)交流及び共同学習ガイド、https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/tokubetu/010/001.htm (参照日 2020.1.28)
- 長山芳子、勝二博亮(2018)通常の学級と特別支援学級の相互的アプローチによるADHD児への対人関係支援、LD研究、27(4)、466-477。
- 富山県総合教育センター(2018)児童生徒へのチームによる支援の在り方に関する調査研究、富山県総合教育センター紀要、36、3-1-3-38。